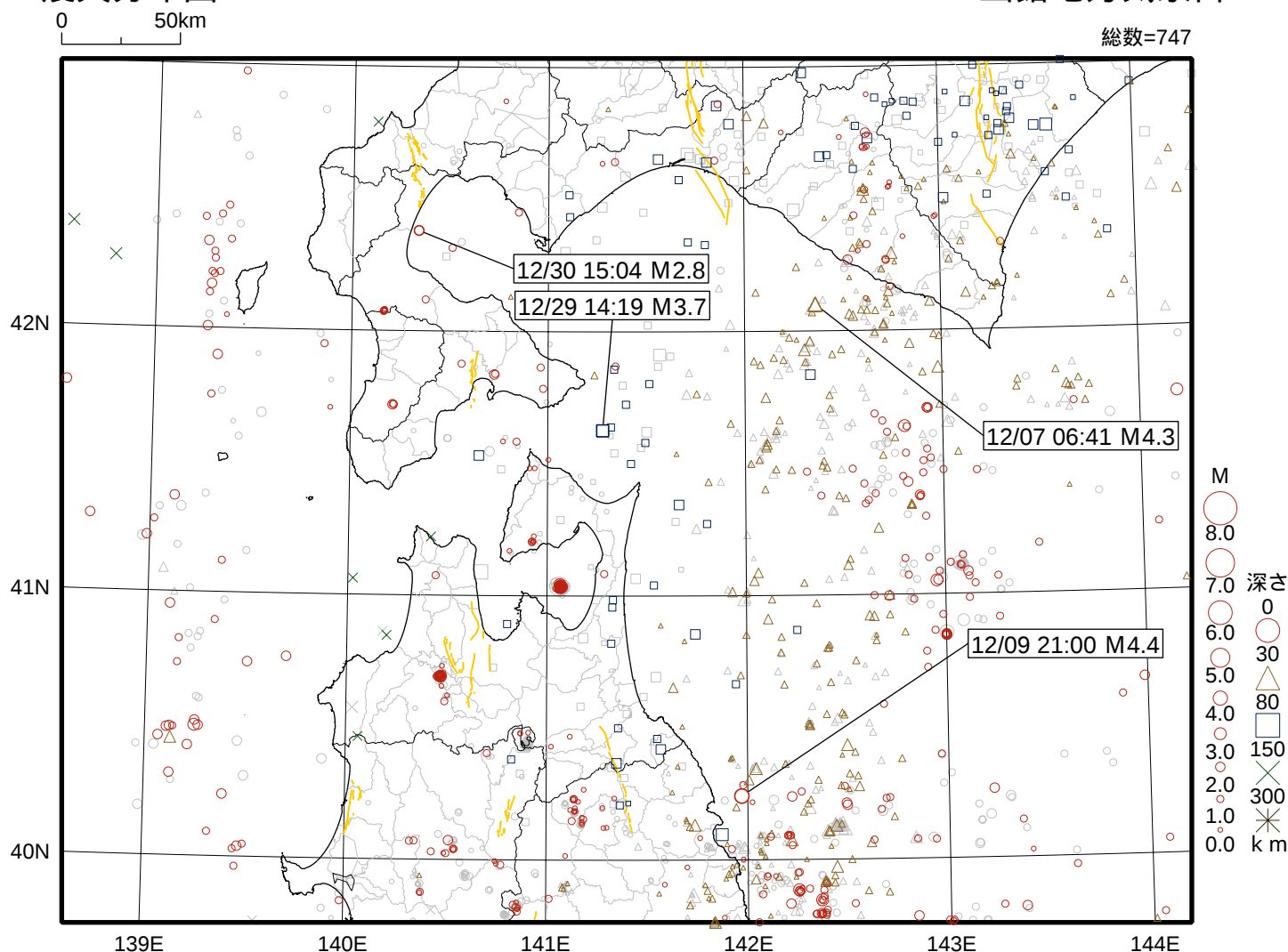


渡島・檜山地方の地震活動図

2024年12月1日～2024年12月31日

震央分布図

函館地方気象台



地震概況（2024年12月）

この期間、渡島・檜山地方の震度観測点で震度1以上を観測した地震は5回（11月は5回）でした（詳細は「渡島・檜山地方で震度1以上を観測した地震の表」参照）。

7日06時41分、浦河沖の地震(M4.3、深さ34km)により、函館市泊町、函館市新浜町、函館市川汲町で震度1を観測しました。

9日21時00分、岩手県沖の地震(M4.4、深さ20km)により、函館市泊町で震度1を観測しました。

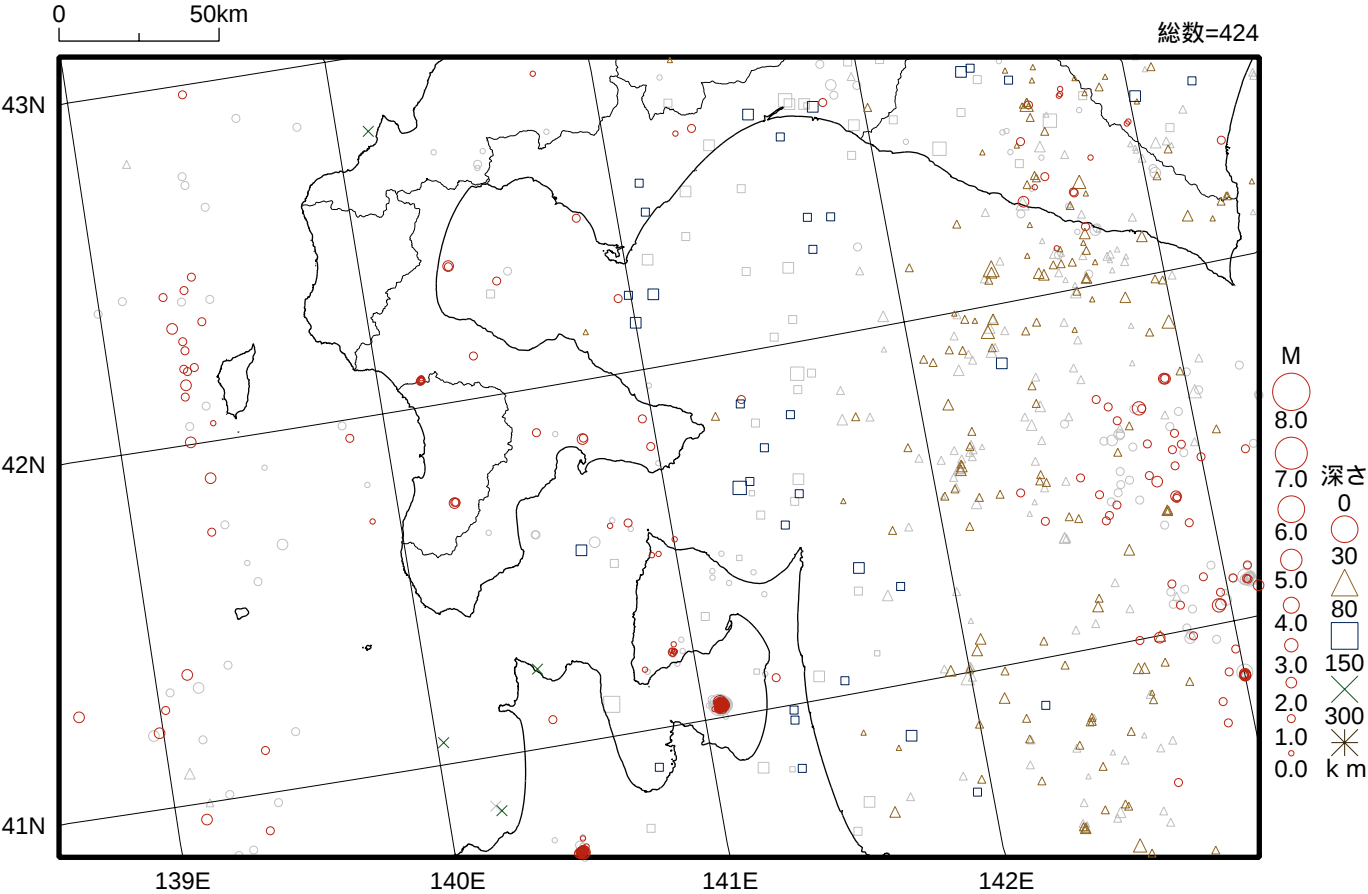
27日21時47分、千島列島の地震(M6.8、深さ210km、震央分布図の範囲外)により、函館市泊町で震度1を観測しました。

29日14時19分、津軽海峡の地震(M3.7、深さ93km)により、函館市泊町で震度1を観測しました。

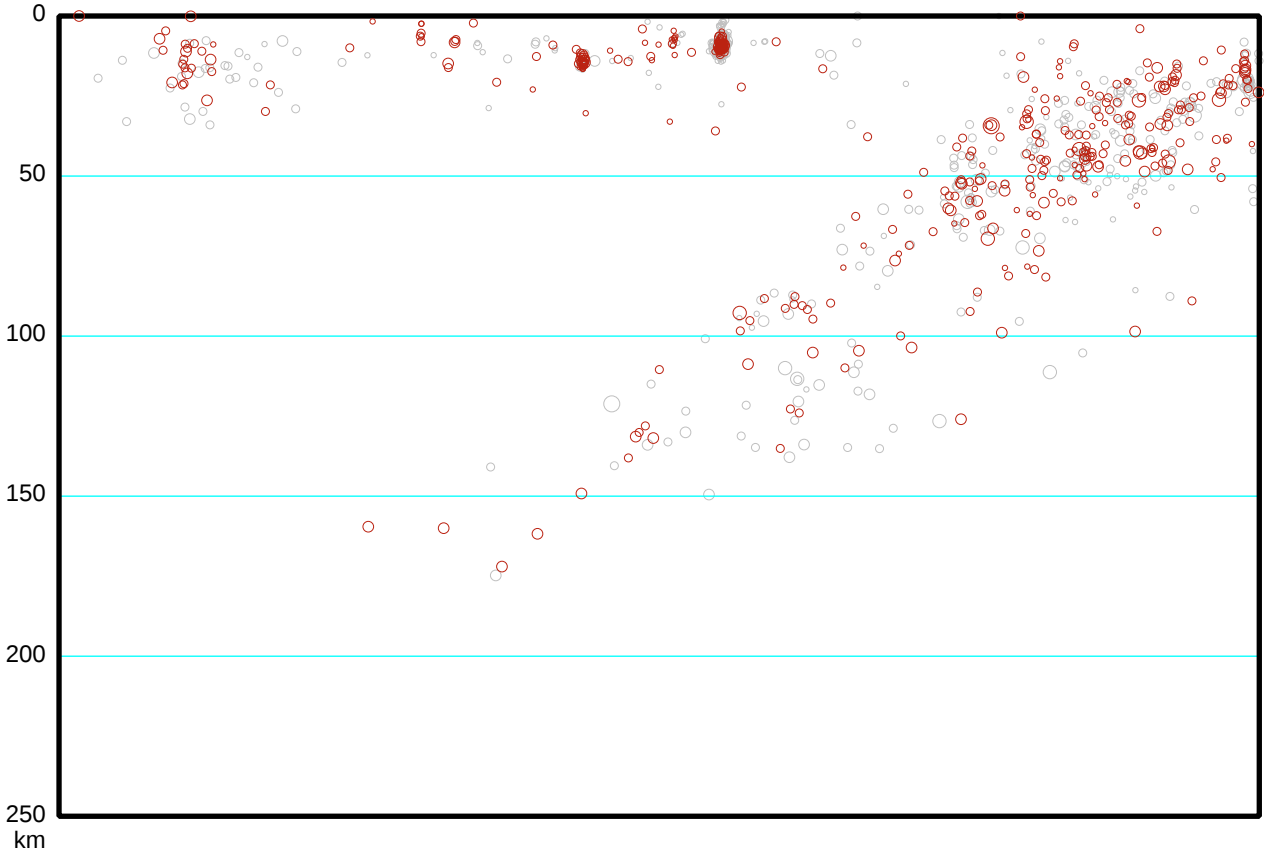
30日15時04分、内浦湾の地震(M2.8、深さ15km)により、長万部町で震度1を観測しました。

震央分布図

2024年12月1日 ~ 2024年12月31日



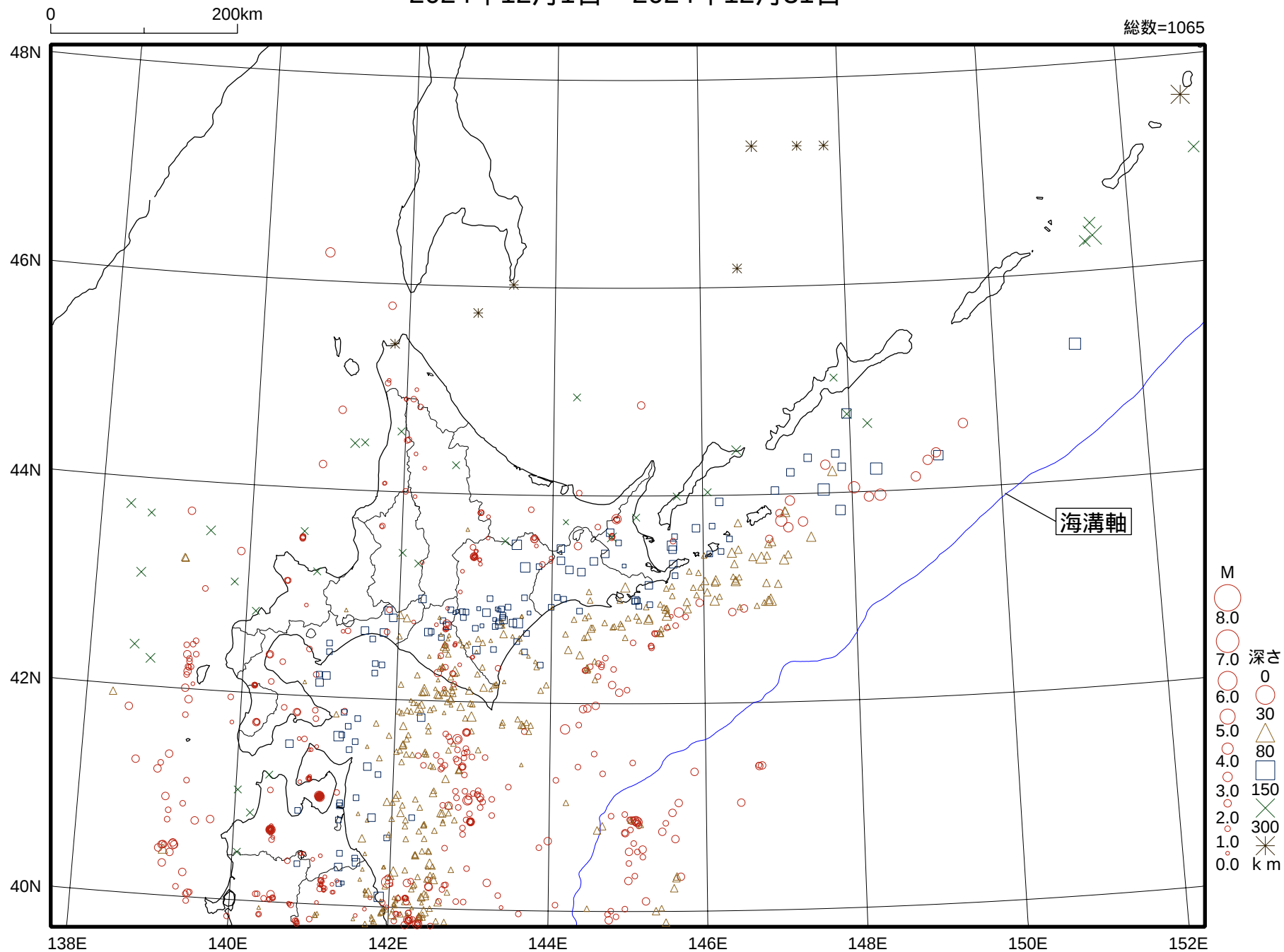
断面図



震央分布図

北海道の地震活動図 2024年12月1日 ~ 2024年12月31日

総数=1065



渡島・檜山地方で震度 1 以上を観測した地震の表（2024年12月）

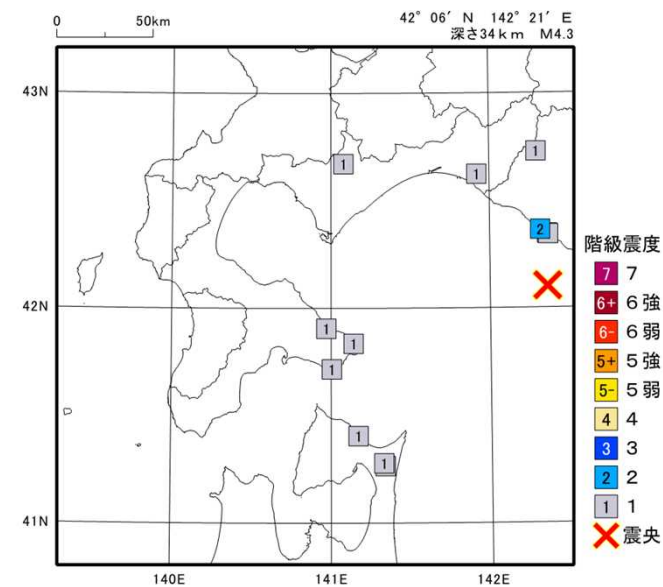
年 月 日 地方	時 分 震度	震央地名 震度観測点名	北緯（N）	東経（E）	深さ（km）	規模（M）
2024年12月 7日 渡島地方	06時41分 震度 1	浦河沖 函館市泊町 * (09)	42 ° 06.0 ' N	142 ° 21.6 ' E	34 km	M4.3
2024年12月 9日 渡島地方	21時00分 震度 1	岩手県沖 函館市泊町 * (07)	40 ° 14.5 ' N	141 ° 58.2 ' E	20 km	M4.4
2024年12月27日 渡島地方	21時47分 震度 1	千島列島 函館市泊町 * (10)	46 ° 20.2 ' N	151 ° 28.4 ' E	210 km	M6.8
2024年12月29日 渡島地方	14時19分 震度 1	津軽海峡 函館市泊町 * (11)	41 ° 37.5 ' N	141 ° 16.6 ' E	93 km	M3.7
2024年12月30日 渡島地方	15時04分 震度 1	内浦湾 長万部町平里 * (06)	42 ° 22.7 ' N	140 ° 20.1 ' E	15 km	M2.8

* のついている地点は地方公共団体または国立研究開発法人防災科学技術研究所の震度観測点です。
()内の数値は0.1単位の詳細な震度（計測震度）の小数点を省略して表しています。

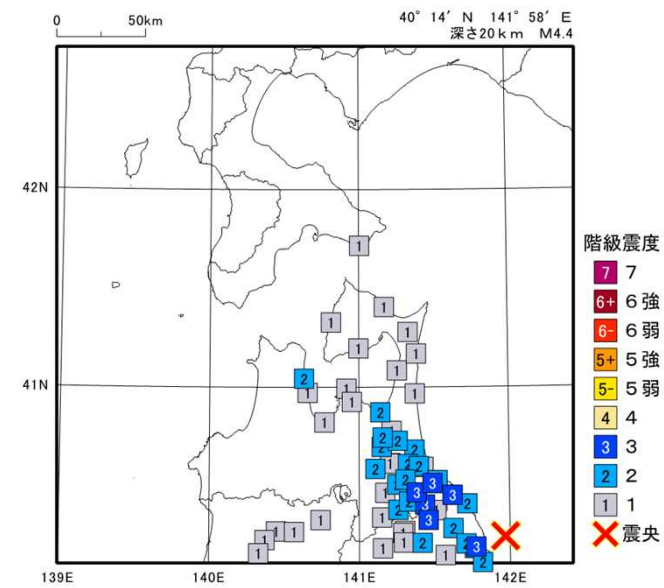
計測震度と震度階級の関係

計測震度	~ 0.4	0.5 ~ 1.4	1.5 ~ 2.4	2.5 ~ 3.4	3.5 ~ 4.4	4.5 ~ 4.9	5.0 ~ 5.4	5.5 ~ 5.9	6.0 ~ 6.4	6.5 ~
震度階級	0	1	2	3	4	5 弱	5 強	6 弱	6 強	7

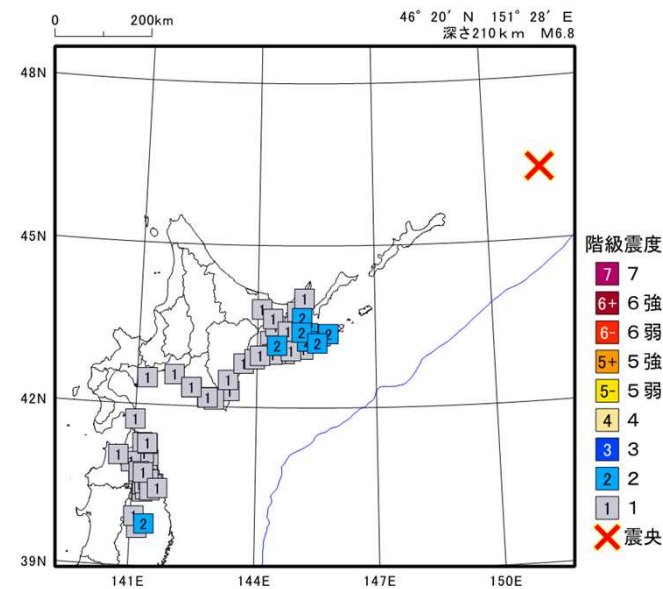
2024年12月 7日06時41分 浦河沖の地震の震度分布図



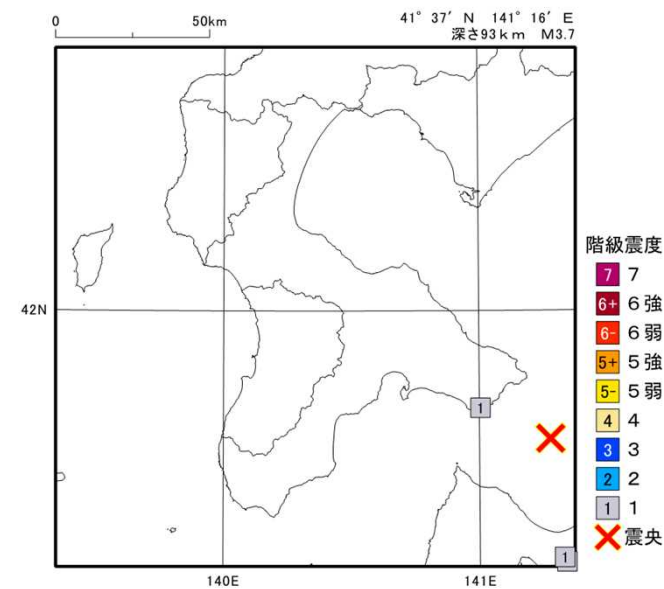
2024年12月 9日21時00分 岩手県沖の地震の震度分布図



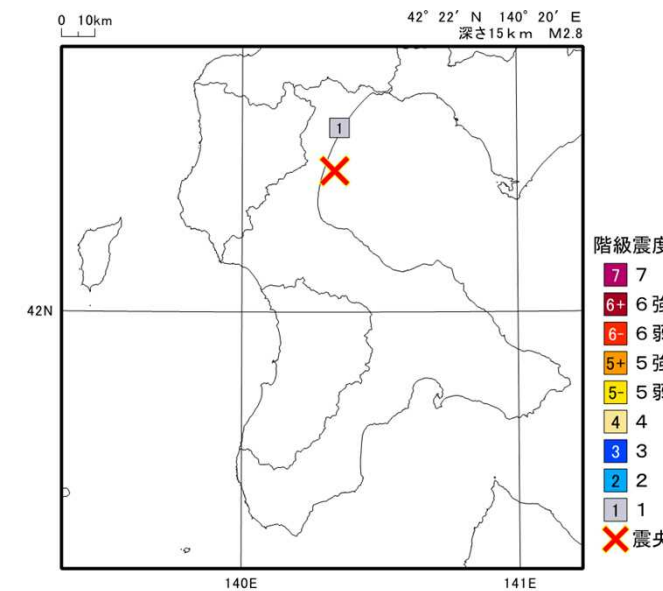
2024年12月27日21時47分 千島列島の地震の震度分布図



2024年12月29日14時19分 津軽海峡の地震の震度分布図



2024年12月30日15時04分 内浦湾の地震の震度分布図



本資料の利用にあたって

- ・ 本資料の震源要素及び震度データは暫定値であり、データは後日変更することがあります。
- ・ 本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。また、2016年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、2022年能登半島における合同地震観測グループによるオンライン臨時観測点（よしが浦温泉、飯田小学校）、米国大学間地震学研究連合（IRIS）の観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。
- ・ 図中橙色の線は、地震調査研究推進本部が地震発生可能性の長期的な確率評価を行った主要活断層を表します。
- ・ 過去の地震と比較するため、前3ヶ月（今期間を含まない）の震央を灰色のシンボルで表します。
- ・ 本資料中の地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図25000（行政界・海岸線）』を使用しています（承認番号平29情使、第798号）。

【防災メモ】

～冬の地震・津波への備え～

発生が切迫している日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震・大津波をはじめ、冬に大地震が起これば、強い揺れや津波の被害に加え、雪や寒さによるリスクが増大します。怪我をしたり、命を失ったりすることが無いよう、冬の大地震や津波には以下の点にも注意して備えてください。

1. 雪や凍結路に対する備え

屋根に雪が積もっていると、地震の揺れにより落雪したり、雪の重みで家屋が倒壊したりする恐れが大きくなります。落雪は人を巻き込む危険があるほか、避難路をふさぐ原因にもなりますので十分に注意しましょう。山沿いや傾斜地では雪崩にも注意が必要です。また、路面が凍結していると滑りやすく、避難の移動中に転倒して負傷する恐れもあるため、路面状況をよく確認し慌てず避難しましょう。



冬は積雪や吹雪などにより夏に比べて避難に時間がかかります。各市町村のハザードマップで、避難場所や避難所、津波避難ビルを確認し、なるべく複数の避難経路を想定しておきましょう。



2. 火災に対する備え

暖房を使っている冬場に地震が発生すると、火災のリスクが高まります。暖房器具に転倒時の自動停止機能があっても、停電から復電すると再起動したり、損傷した電気配線から漏電したりして出火する「通電火災」の可能性があります。

避難の際はブレーカーを切ってガスの元栓を閉めるようにしましょう。地震を感知して自動的に電気を遮断する感震ブレーカーを設置することも有効です。

3. 寒さへの備え

地震で電気やガスが止まり、普段の暖房器具が使えなくなるかもしれません。在宅避難に備えて、停電時にも使用できる暖房器具と燃料を用意しておきましょう。冬に屋外や寒い屋内に避難する場合は、低体温症にならないために、防寒着や防寒靴、毛布、カイロなども用意しておきましょう。

特に衣類が濡れて体が冷えてしまうと、低体温症によるリスクが高くなりますので、着替えを準備しておくことや、着替えをポリ袋に入れて濡らさない工夫も必要です。冬は身支度に時間がかかるので、これらをいつでも持ち出せるようにしておきましょう。

